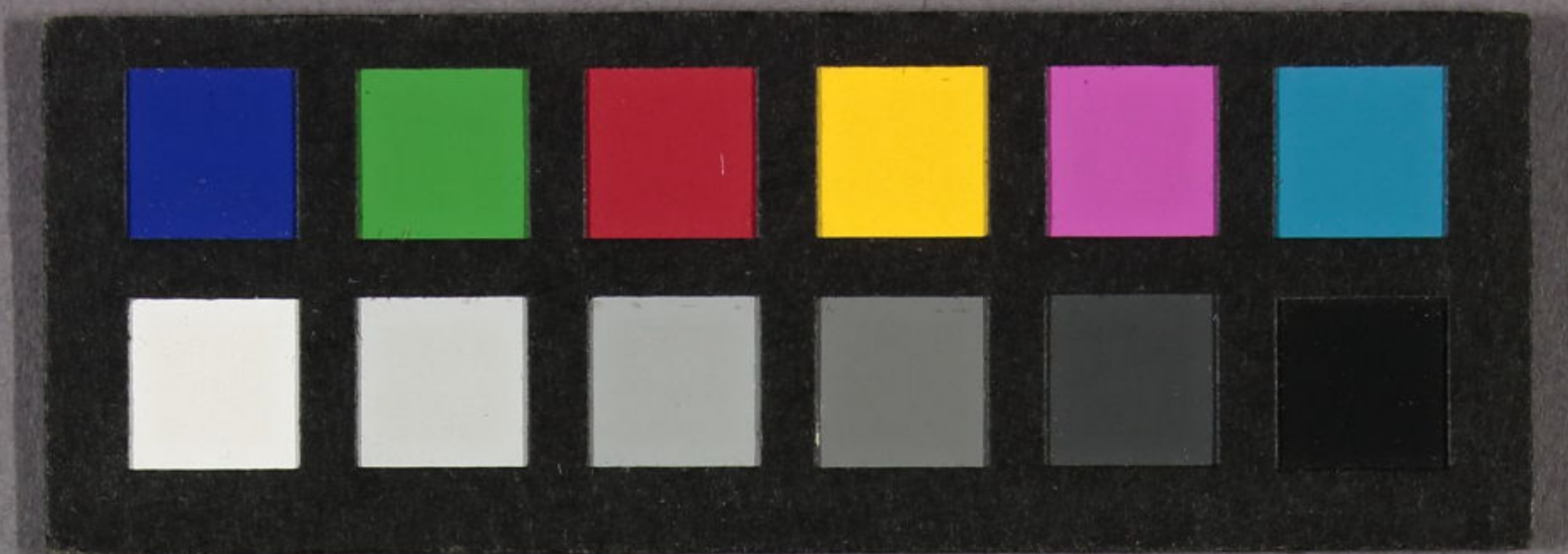




御譜袖珍鈔

五

五





袖珍抄附合歌仙之部卷三

目録

古終合歌仙之部

鳥のさ 一巻 拾遺 二巻

百 一巻 密柑色 一巻

星合集 一巻 拾遺 二巻

伊達衣 二巻 印の字 一巻

袋裏紙 一巻 壬生山家 一巻

枕裏集 一巻 未束記 一巻

夕影書 一巻 未束記 一巻

冬雪扇 一巻 拾遺 二巻

雪の苑 一巻 三日月見 一巻

子多掛 二巻 拾遺 二巻

句抄別 一巻 三つとろ 一巻

物の歌 一巻 松崎獨吟 一巻

二ッ指 一巻 拾遺 二巻

多此乃
本節虎王

秋を以て然る也 四時を以て然る也 授子此書 亦節

月残る物あり火新打きて
起きて酒を飲むとて酒を
七考

降する飛電を我の二騎
手れ能く方々射す

夕照とくく隣の猿とあり
考
何の衆とも志強ぬべき所
然

おつて、おのちの宮崎県
うしろの山々を、おのち

松楸の蔭子と月桂とを
深うく引け落る秋風 考 哉

ハ朝の礼をてし仕舞なり
舟倉の禮乃時をてるなり

西夷漢之地理之書其出於
於書之少之通志其多也然

考
 節
 造方て細繩を以て其の極
 里を繞て千石を以て場定

二ノ
年礼を安き所ら修む

陽をたうと云ふ
 けのうと云ふ

五ふ既色をとりたりと云く
 半若く四面よりをとりと云く

牀の板よりあはきつゝ
 ちやんとあはせ枇杷と着込

姑とむすめといふはよく
客は皆多くて集り巨艦は百
餘

五の五種なる物さうなる
 髪中へさふとゆるみれぬ

本より十ノミの棉ぞうしを
 備作は中綿仕あひて喰ふ
 考

桶も雲も阿も一とき掃
投もあまも空も猶一とき掃

其事物と云ふ掃除目考
頭等と云ふは、ある意の山然

付しれ把る素直者

百轉

常や解ふ難す。松の先 考
 日ハ未だチイ魚はあゝか 考
 やハハ只數人を見きけて 考
 なくはくはく。第おちり 考
 び。移存。松。上。啼。て。移。 考
 何。も。以。ぬ。一。毎。の。歌。の。歌。 考
 云。は。玄。師。の。一。句。和。意。き 考
 云。は。子。れ。石。や。も。あ。る。付 考
 くら。く。と。き。す。る。を。き。き。 考
 瓦。の。ふ。れ。い。流。形。成。就 考
 二。三。年。た。つ。の。ま。え。れ。や。 考
 髪。を。と。や。と。人。を。と。顔 考
 叶。あ。ふ。り。槍。付。ま。れ。の。 考
 機。を。と。指。を。角。力。取。れ。第 考
 何。部。の。因。り。や。后。の。考
 招。明。の。事。れ。す。と。じ。く。あ。る 考
 所。供。ふ。る。唐。女。も。未。ん 考
 云。い。は。し。と。お。の。飛。入 考

二
三

[illegible]

星合集

下掩れく今蒲苗抄付の諸通
 係ある常ねくお母無え
 所より四五枚書けりやうり
 くれゆゑ並書しゝる淨麻
 差の生々をねねうゝところ
 方撈もすゝねく愈々そ
 折りれ葉とせうむささ
 休も自も權つひの都く
 薄くむゆれ隣りやせ
 わり手ねくうら打張まゐる
 月もあもりゝ萩のうね
 秋きて又一まきり茄子け
 落涙たゞく僧本れ月
 分おれあやまゝ書れね
 福不傳らえて浮世さうり
 散る時たゞねいゝゝぬき
 細くすゝくそそ若くさ

州 邦 通 秀 毫 外 州 邦 通 秀 毫 外 州 邦 通 秀 毫 外

卷之二

崇山 良山 良山 良山 良山 良山 良山 良山 良山 良山

附三全

牝山 棠 良 翁 山 牝 棠 良 翁 山 棠 翁 山 良 翁

伊達君 おふり

おくれあや月々ぬきを新葉
ゆきふりてくわゆる之草 葉
切り落す山の井はるるあれて 葉
時つとひすゝるの桐橋 葉
いふれうまはう月をこのうた
あふりたるまはう月をこのうた
秋より鳥の縁をわたり 葉
いふれうまはう月をこのうた
あふりたるまはう月をこのうた
棒弓矢の羽はを乾くや 葉
新事を清くあつきの新 葉
松齒の工吹弱くまき 葉
ほれまはをいふなり 葉
筆への筆はをいふなり 葉
されてまはを傾城は 葉
貧乏を新くまき 葉
月代ひつゝまき 葉
神で海魚つりぬる 葉
おくれあや月々ぬきを新葉
ゆきふりてくわゆる之草 葉
切り落す山の井はるるあれて 葉
時つとひすゝるの桐橋 葉
いふれうまはう月をこのうた
あふりたるまはう月をこのうた
秋より鳥の縁をわたり 葉
いふれうまはう月をこのうた
あふりたるまはう月をこのうた
棒弓矢の羽はを乾くや 葉
新事を清くあつきの新 葉
松齒の工吹弱くまき 葉
ほれまはをいふなり 葉
筆への筆はをいふなり 葉
されてまはを傾城は 葉
貧乏を新くまき 葉
月代ひつゝまき 葉
神で海魚つりぬる 葉

二

あふりてくわゆる之草 葉
水やこれぬきを新葉
まき雛をいふまき 葉
かへて雛をいふまき 葉
いふれうまはう月をこのうた
あふりたるまはう月をこのうた
おくれあや月々ぬきを新葉
ゆきふりてくわゆる之草 葉
切り落す山の井はるるあれて 葉
時つとひすゝるの桐橋 葉
いふれうまはう月をこのうた
あふりたるまはう月をこのうた
秋より鳥の縁をわたり 葉
いふれうまはう月をこのうた
あふりたるまはう月をこのうた
棒弓矢の羽はを乾くや 葉
新事を清くあつきの新 葉
松齒の工吹弱くまき 葉
ほれまはをいふなり 葉
筆への筆はをいふなり 葉
されてまはを傾城は 葉
貧乏を新くまき 葉
月代ひつゝまき 葉
神で海魚つりぬる 葉

尚

1

百

白

7

10

2

1

2

1

1

1

24

2

7.

仁

子

二

六

人

2

七

五

人

之

2



茲

10

二

1

1

夜信風豆辰信節矣豆風信

言信是矣矣辰修辰弱言辰弱言是矣凡信弱

拾遺

夕のや夢の境とる交中浦 有
 西月をふせく露の下井 有
 ちくくと海濱は海風のつきて 有
 るれまゝのうらみれも人々 有
 一貫の跡で居るく程の月 有
 解く轉るは庭の坊のき 有
 松茸も小僧おねいりし時 有
 ちくちくはも人々はくち 有
 其まのつぎは海風の口で 有
 旅れ馳走は最籠き一掌 有
 もれはくちのひてもふは 有
 その月をいく夜をくち 有
 光きしと川よりききき 有
 来れ味かたはくちの福 有
 月影は名波の海きくち 有
 音のねくちの初風の吹 有
 花れまゝは海風のいくち 有
 去はくちの草の白の尻 有

三

伊勢の山は夜は花の雨 有
 楓は木をすすすとの雨 有
 尾も踏くぬききき 有
 揺るるをききき 有
 きくちくす花きや藤の市 有
 秋もくちの雨きき 有
 合上忘のゆきき 有
 振るるをききき 有
 木く抱けく 有
 作山は山をきき 有
 月影はくちの雨 有
 友のねも 有
 荒くち 有
 陽れぬは 有
 此月 有
 昔くち 有
 くち 有

密柑色

江戸に於ては、
 止亭の月多し

升子てふお勢の月足れ

秋の阿久比魚爲連立畦止

家の何れに於てか

いづものうせうこのむ中服 洒落

此丁卯と誤て去利を呈する也 支考

校の校をねろーとてり 之通

漢川より西谷まで。青丘

灯のともつゝ亭のつきけ

美とれい腕のくるとんの燈より

坂下へ一里ほどあり

照付て字も志やうにふれず
あ

村の如くせし集て集る

婦とて女とて地とけ

大なりうゝ子れ秋の萩や

けの美を又呼ぶす船の月

すきの舟（塀）

叔父を以て其の好むを以て

朽く之ぬ妻乃旗人

10

18

三ノ

卷之十

老に及んで人を知る

又あつて

又作(一) 亦作(二)

竹葉山の三

竹梅くま山川の李

太極の細孔よりて動意

新林之
 人々
 新林之
 人々

此
止

て
逆
れ
て
た
る
像
み
な
る
者

也のちある村の

二
上

此の世に於て一可定

公入少の

新入官衙工役之井水

おのゝきふしはたかく

[illegible]

山崎闇斎

拾送

三拾

九

け里々山を四面やそ擁り
 多うてほそく始る炭竈
 白雲
 波う飛らびぬれ雲出
 雲雁
 障くしてふきそを月
 桃隣
 猶る暑れ門のり
 荷車
 小地段のそと並ぶ義芒
 以之
 終るれ柳を小葉てはとる
 枕先
 世徳をいのる九世の親
 枕後
 倦人よ明てむとす小袖捲
 孫
 何れれとて先く告の毎系
 考
 態の子れ親を思ふ思を
 講
 きりて付する虎の三月
 乃
 空を柳をいろり垂れはるや
 丸
 うつゝののれハ歌きき
 な
 花散て柳を二葉より乞
 之
 是ともいふぬ火屋の白幕
 枕鉈

水 水 之 雲 後 先 經 丸 考 局 之 存 後 雲 先 隣

拾遺

さひまをぬけて降雲うれ 大章
ちくくたる霧の煙火 去来
鯨ひく仲一浪あけて 舟
苗莪神の砂 漏れ 松 氣彈
けうけの入り月のおきみ 来
あふけりき旅の情子 子
あふ付の心すすめ神を云 浮
を尻つすするれ子 舟
里留て実も 梅田の丘境 子
かゝ血くさき世の修行人 来
つふまゝ子體やき二階を 舟
このふ火のゆる舟くれを 浮
峰飛や樹とよく月のか 来
あきき本実を結す體を 子
踊場まがうてと吏の二ふ出 浮
あきけらけの神をいさ 舟
冊子に紫衣ぬるむ色 子
あふ本の杉の舟の宜き 来

三

今川の武威を来る 酒神 舟
ほてりとするまの不屈き 浮
津路にまをさうれ来の砂 来
まをれ宵一あふかさあ 子
町端の夜掃く光て火に焼す 浮
死をうかれらる相父の忠告 舟
月すちの酒れもに堂の煙 子
肉衣の煙入一 来
救護の川とさういふ来の来 舟
墓もれり秋を来あふ 来
傘取もやふも 浮
松灯さうく切の相や 子
切うれ底うとる店を 浮
把て手味やき那の森を 舟
ひくをみかきさる来を 子
あふもゆるぬ匠志の来 来
あふてけ端ゆき氣を 舟
依のふきとる巾を 浮

拾遺

引致すおれすきやの月 幸
 枕は露草とさう焚 月 幸
 買ふなり狸筆とさうを 取
 旅山よりけの啼 幸 史邦
 病て書す旅のつれなきの面 幸
 残すきそ人て野きさの夜 幸
 人の足ぬ時くは泣物 幸
 こよひも舟より起す 幸
 山より猿のささる木つき 幸
 尾張さうつす木をけ大根 幸
 破ゆさ素襖ひとひいさき 幸
 うけしうに呼るもの 幸
 着るうろ方ま中人を 幸
 酒の耐解る夕暮れ月 幸
 楽笛と初て合する秋風 幸
 中れ啼き起さう人 幸
 花咲と旅母人もあう 幸
 舟あへへる松中のそ 幸

二

水のたき焚きしは 幸
 焚のすうふわうあ 幸
 酒入のちひさき破 幸
 物のうけうねむり 幸
 うけさもつさ 幸
 孫せうくさく 幸
 枚きり桐の松も 幸
 たきもの始て 幸
 かけひやうて 幸
 序書より中 幸
 夕月さうん 幸
 盆の佛れ 幸
 値る湯屋の 幸
 小事のむけ 幸
 傘たむけ 幸
 野一にもあ 幸
 衣束と掃あ 幸
 何うろきて 幸

三十二

拾遺

本は月をけしけり
 明日ある人ぐやううま
 蝶陣をさすはるの情
 月のあけひとううひ
 子抱るううあき月の
 猪のあうう夜う枝の
 石撞の透月もくく
 良うう然るう
 ありけり
 東風やうう雪れ
 貴花とせん人の
 舟戸のううわき切
 海うう裸うう月
 ひううなうう
 床てううう
 神ううう
 せんううう
 日あきあうう二日

ニ

所はたゞきりゝ搦をひくう也
 すけなくせいのるささけ敷
 まの根の熾燭なす稲のりと
 ひろくのきぬゝ雲うつなり
 勝るおも個雲を中人へ廣く寄
 中へ彩しきまふくむときく
 佛にうつろひたりありそ
 源氏をうつもあつたりつて
 ひちぎれおとあきかよふも
 花子橋のうち火の雪経より
 う月をあらはえゆく秋の空
 あふひろく人いこのひびー
 ニウ
 あふむれむの貴く名をつけて
 能又よゆの人見わづけさひ
 のり二歳の弱を授けずん
 踊虫さへあつぬ花のり
 隙くる花は涙もみられすや
 きーやうりく家松より芳

拾遺

起卧の床はあつたにふあふは
 物やえううと夕まの暮る
 り趣ゆく夜露のぬくりに
 石やうへへす飛う月の月
 衣はききききききききき
 火の音はてふ秋とととと
 けあふと念せとやけつん
 雲やぬめりねの移る
 立く中も霧の雲雲雲雲
 赤のく人よ地と人地と
 空をてふ美女を愛する思
 紅粉白粉の市の何と
 赤白の秋の夕輝はきき
 解く解てふ海乃月
 遠望の舟の中あきり
 中をけさる朝霞うす
 夕陽のむくむくは人よ
 夕す息あつた秋ききき

二

赤の程を足あつて飛性
 黄のり入てせはき勝る
 果れ目を棒にかけきき
 今をききききききき
 二はま八市のねねと
 多敷やう月け十五夜
 今利拾ふは秋の夕輝
 椒あつた三の樟け本
 つくしとせうにま
 父の娘を泣けり玉
 うかすも雲の遊る水
 りふもやけり上る上
 ぬきふの海にけり山
 染まかき子の子あつ
 けききききききき
 りつとけきききき
 花とぬききききき
 色はぬききききき

良英 飛 明 英 良 凡 弱 良 流 弟 英 院 凡 英 良 良

9

英 良 英 良 英 良 英 良 英 良 英 良 英 良

拾遺

腕やと手心く切れ美きし 季下
 せしとあし隈く大根く舟 其角
 月をさすの海や枯つらん
 こやろきとる書とみゆき書 下
 面とつる能く教とるくさくさ 下
 傾席と茶の杯とくさくさ 角
 教の湯のこさといふは州 下
 意ハ天下一書乃 新 角
 又育れ金持の書とつて唱 下
 再とつり能くつちとる 角
 其地とあつたといふは 下
 士婢れとるをむか 角
 仙石て西より中々の鏡より 下
 名うとらうとる 角
 野荒のふとる男内よりし 下
 其書君とるより 角
 月とる書とる 下
 其もあつとる 角

拾遺

腕やと手心く切れ美きし 季下
 せしとあし隈く大根く舟 其角
 月をさすの海や枯つらん
 こやろきとる書とみゆき書 下
 面とつる能く教とるくさくさ 下
 傾席と茶の杯とくさくさ 角
 教の湯のこさといふは州 下
 意ハ天下一書乃 新 角
 又育れ金持の書とつて唱 下
 再とつり能くつちとる 角
 其地とあつたといふは 下
 士婢れとるをむか 角
 仙石て西より中々の鏡より 下
 名うとらうとる 角
 野荒のふとる男内よりし 下
 其書君とるより 角
 月とる書とる 下
 其もあつとる 角

拾遺 南窓一片春と云歌ふ
久野やとわれくと知や我 来
旅の友をささひ我を去ぬ 来
信の成す様の危掃きて 来
よとにきく一瓶の酒 来
月明て灯火赤き海の上 来
峰の影と吹雪の地と 来
は酒を杯持て酒を 来
直位あつて美女を 来
提灯と大唄の音 来
あふよりまの枝 来
世はうとまの枝 来
つむいあまの枝 来
仇人のあまの枝 来
何と月とまの枝 来
啼返る八重の枝 来
軍れか滅うとき 来
去はふんとき 来
涙はふんとき 来

三
雨降ひ陽を消るはうと 来
小姓はゆく華れの中 来
丁寧もゆきゆく 来
あまのものと次 来
多き付き 来
たれやや 来
冥加を 来
毛織を 来
こゝろ 来
日を何時 来
きりく 来
草たく 来
いれと 来
四の 来
鼻つ 来
何れ 来
縄き 来
持て 来

三日月日記 和漢

破風^ハの^ニ月^ノ氣^ヲや^ハる^ニ夕^ノを^ミみ^ル 事

煮^ハ茶^ヲ繩^ヲ避^ル煙^ヲ 事

合^ハ歡^ヲ醒^ル馬^ノ上^ニ 事

か^ハさ^ハる^ニ小^ノ田^ノ水^ヲ落^スる^ニ 事

月^ノ代^ニ見^ル金^ノ氣^ヲ 事

露^ハ驚^カ漆^ヲ玉^ノ涎^ヲ 事

張^レ旭^ハあ^ハき^カく^ニあ^ハけ^ル中^ニ 事

懐^ヲを^ミた^ハち^ニく^ニく^ニひ^ラけ^ル 事

挈^テ帚^ヲ驅^ル偷^ハ鼠^ヲ 事

ふ^ハる^ニ都^ノ二^ノ沙^ノ中^ニ靈^ヲを^ミ 事

く^ハろ^クぬ^ハ首^ヲか^キく^ニ板^ノの^上に^テ 事

乳^ヲを^ミの^ハび^テ捺^ス何^ヲを^ミま^ス 事

舟^ノ鐘^ヲ風^ノ早^ニ浦^ニ 事

鐘^ノ絶^ニ日^ノ高^ニ川^ニ 事

教^ハる^ニ早^ニ苗^ヲ洗^フる^ニ 事

含^ハハ^スく^ニけ^レぬ^ハぬ^ハを^ミ大^ノの^上に^テ 事

説^ハ教^ヲ三^ノ社^ノ本^ニ 事

韻^ヲ使^フ五^ノ車^ノ填^ル 事

花^ノ月^ノ丈^ノ山^ノ開^ル 事

條^ヲを^ミ杖^ヲく^ニむ^ハぬ^ハく^ニむ^ハ 事

剪^ハ銀^ヲ點^ス一^ノ寸^ノ 事

箕^ノ面^ノの^上に^テ或^ハ玉^ヲを^ミ敷^ク 事

外^ニ日^ノの^上に^テ或^ハの^上に^テ 事

風^ノ飡^ヲ喉^ノ早^ニ乾^ル 事

内^ニ火^ノく^ニぬ^ハく^ニぬ^ハを^ミ大^ノの^上に^テ 事

霧^ノ籬^ノ顔^ノ孰^ニ與^ル 事

震^ハ浦^ノ目^ノ潜^ニ馬^ニ 事

物^ヲを^ミく^ニり^テ或^ハの^上に^テ 事

山^ノ伏^ニ山^ノ平^ニ地^ニ 事

門^ノ番^ノ門^ノ小^ノ天^ニ 事

鷗^ノ鶴^ノ窺^ル水^ノ鉢^ニ 事

あ^ハる^ニく^ニり^テ或^ハの^上に^テ 事

更^ハ子^ノの^上に^テ或^ハの^上に^テ 事

臨^ハ谷^ノ伴^ノ蛙^ノ僊^ニ 事

拾遺

のまれりける大寺の秋 去
 泪けかきせし 今此月 仙
 菊やとのあふくき 庭を 菊
 浮舟の秋は け 假こす 池
 破れゆく け けの 風 去
 多作阿やまて 仙境へ入 菊
 とや 寺も 中れ 寺も 中れ
 い つ も 初 吉 れ け 去
 市町も 寺も 中れ け 去
 阿の 伊達 後 寺も 中れ 池
 むつ 寺の 寺の 寺の 寺の 去
 秋 寺の 寺の 寺の 寺の 菊
 市 寺の 寺の 寺の 寺の 池
 破れ 寺の 寺の 寺の 寺の 去
 小 寺の 寺の 寺の 寺の 菊
 思 寺の 寺の 寺の 寺の 池
 天 寺の 寺の 寺の 寺の 去
 飯 寺の 寺の 寺の 寺の 菊

ニラ

夢 寺の 寺の 寺の 寺の 池
 庭 寺の 寺の 寺の 寺の 菊
 世 寺の 寺の 寺の 寺の 池
 寺 寺の 寺の 寺の 寺の 菊
 泉 寺の 寺の 寺の 寺の 池
 外 寺の 寺の 寺の 寺の 菊
 春 寺の 寺の 寺の 寺の 池
 寺 寺の 寺の 寺の 寺の 菊
 古 寺の 寺の 寺の 寺の 池
 先 寺の 寺の 寺の 寺の 菊
 日 寺の 寺の 寺の 寺の 池
 や 寺の 寺の 寺の 寺の 菊
 中 寺の 寺の 寺の 寺の 池
 内 寺の 寺の 寺の 寺の 菊
 松 寺の 寺の 寺の 寺の 池
 花 寺の 寺の 寺の 寺の 菊
 花 寺の 寺の 寺の 寺の 池

[illegible]

2

沈 孫 去 孫 沈 去 孫 沈 去 孫 沈 去 孫 沈 去 孫 沈 去

拾遺

塩少くもさうせん都る
 只そのちる波のあら
 川底の杭木や能のつらん
 ふきふきと毒みりり
 又とくいつさうそと岩板
 うらうら吹出す山は秋風
 ふうすたれんすくやうき
 油あふく雪そそりて
 浦島や揺る石けて悔む
 氣切れゆくも謝れ夕浪
 枝小舟米地れぬさむく
 花も難もあま生なり
 とねこれへあそび女共
 大喧くひはそく
 一柱れ月八ツのからさう
 ばくらとありし小男
 数芝折ぬれて袖の面
 左にちを宿とく

三

麦飯の華やまを
 姉あふのりとさうと
 幽霊ハ残像舟より
 さうさふくひも
 奴くうう今
 聖天さくつ
 水面の志を油に
 ふうふう
 中ふひをす
 敵う不
 形の月横町さう
 後家とおひ
 古男さう
 野乃床さう
 庭出さう
 きせしもの
 依は
 古弟さう

拾遺

夏月万のふきの通り町
なう敷ありぬ有板れお
新苔三島かれ二西踏
其の紫とゆふこれ味音の浪
甚ぬ棚あり小舟とさうり
下男うをふ市その時
紫のを光脱履よりれ
草草吟ふくすうら
其餘の縁他の叙を裁て
あそここの縁をれ山
隈の峰より月れ落り
秋を望布れ床の山風
焼の熱啼あふま
膝をゆけれ三位入る
かと膝て死嘆ふもあは
又孕せく膝子そあ
常れ柳ら重子を極るん
龍田乃れく上情更として

ニ

毛毬を市門の目やとあうと
そや雲常霞滞舞する
成と雲霞あのかい海吹とあ
嵐うあう子親
押入や淀れまうの影
織物まその衣笠の
能きま事の時の松え
度揺うた人ゆくあう
る影もる影の雲の
組板の月揺舞乃不
背れ秋三子婦人の井
静也もこのまを大落の時
叔母と静今のもつ
大坂くのまの
那の火入とやい
鬼一り
花の時子あとい
あれくせりの王代乃

拾遺

於叶垣結し本風もそ家か 塵附
かきおろしうやわれまひる面 一品
おほけりる世に様を拂はん 石
市々くかきとあふ如月 樹
良きれ度ハ小袖をおうけて 晶
紅白の菊ゆるり暮を採 石
あふる卵塔面の目とく 樹
今人ハ様をうけてお成る 晶
楊弓れ及夫ハ御簾よりして 石
上条の計とくくハ三線 樹
うもまの襟を落しう彩り 晶
密ま触よいのちつ様まき 石
お度そのうちあふり起され 樹
ううくおききとあふり 晶
母の親はあまて月を背けり 石
うりおてとくぬがやま顔 樹
通板木の階書とてぬく 晶
楊弓けりるお清ふたれ 石

ニラ

ま風の池に鏡をやり出す 樹
かきおろし様をきくふく 晶
院の四ハ餅茶芥人君を幸 石
まお深のそとを減する 樹
おの清姫のまを指すん 晶
月那とたるとそりの数 石
新しき嫁ゆきとそはす 樹
きと後れ臣ハいさ 晶
ふきいやくと真衣を宝とす 石
お姫も持れハゆきとや 樹
うもまのそとと花ハ九十九 晶
園れとくハと念御出さく 石
蓮すく大と清姫来さうり 樹
楊弓とととととととと 晶
あふれ様ハととととと 石
ねととととととととと 樹
お成のそとととととと 晶
う啼とととととととと 石

さつさ

まゝと各月れおや茶臼山 石
 肌きくくかりき 初 立圖
 秋は葉のそれ白ひく藤青 石
 ほくろく雲したをねえや 石
 かはるる星の入るる舟 石
 夕も一日畔乃ねく推 石
 宿ありと五里程の童童子 石
 ちいさく十念をすり 石
 水仙はさうとてすす林青 石
 松純すくさ盤ありり 石
 登られぬ大内山は后の杯 石
 めくくくく子親す 石
 かりを免く尻をくく川海 石
 かりてさへ西りい 哥 石
 秋すくく烟く化るく燕子 石
 花火と傳て星をかり 石
 傾城と様の中く神の月 石
 瓶のおりく星をく根 石

ニラ

奥鏡寺と云へるも麗き 石
 附木黄すて帰る白面 石
 地獄の部屋と棟をく 石
 沙石と漬てすも不可思 石
 精多もりく起る嫌も 石
 ねるすてんく江戸の舟 石
 三ッ橋くむ老の姿も志 石
 中くけくくくく 石
 市成家とく鉢勸井の化身 石
 狸のうろこ 二十六頁 石
 仙人と知るくも秋の月 石
 そのあくくく木城 石
 むくくくくくく 石
 い川こえくく人く 石
 みちのくくくくく 石
 かくくく世を誰くく 石
 花もくくくくく 石
 能くくくくく 石

拾遺
松齋獨吟

松のそれ皆登り来る序の
 辺丁の政を始めては、
 凡中目はうつくしうつひて
 月行まれに、
 陸を留あうまに、
 世とて葉山子を、
 ころもや陸の、
 一備すこい、
 との、
 名もなき川を、
 つま立て、
 月よ、
 かくす、
 んれあ、
 死あれ、
 襟井へ

拾遺

ねえつけて雪見ふらふ残子が
 疎わさる古く捨る秋ぬき
 松風ふゆさ日食のすくむて
 静白をれぬうて地りち
 ふゆく舟押はるの秋のれ
 けく山の端と月れ一尋
 きぬくや鳥帽子重おきぬ
 眉をさむも触るくは終女
 家子おひつともおはるあそ
 千飯のふれは冬さきもはし
 是て事さる布き若きあき
 浅うつりて能きおぼくは
 門路の顔足る人いあうりや
 後う雨りる峰の移る
 能きとて静てくはの移る
 夜のゆありと携つあす月
 うあくと縁候ふ死の訪れ
 誰ともあうて観る黄香

拾遺

雲の如く唄るの如く我まよふ道
 舟をよそと人梅れ子受 家
 舟渡す外西にほれ食すて 友
 新婦 阿そす 藤立の衣 弱
 将ひさる船の乗場を沙月 成水
 火と煙を直とて吹く秋 芳良
 てしとと機坪を直とて 多葉
 船目いひうひきとて 珠敷 水
 け新婦又あき人のうやむ 良
 親ううううとて おもあなり 通
 妻のさわき舞もさめぬ酒 波
 夢の所ををあらぬ所 正
 不二結おひ結とて 弱
 母の佛を飯う 何れ 水
 度欄二白浪の桶を 五
 帰るをすけん 舟門の 為
 舟すうつとて 舟 通
 破れ船の骨を 又

三

初秋やと帷子のけきなり 弱
 後うろくひくはく心 弱
 さんとお娘の歌の美き 水
 いやきあふつり 又 通
 舟多る垣子 又 弱
 うそとうえと白髪 又 水
 舟はうろくあふき 良
 舟う月を吐い 弱
 秋山と山休のいれ 弱
 これ人もあふけし 弱
 おもこれ何とて 通
 心とけく 弱
 文字ひとつて 良
 十あこく 通
 舟を舟とて 又
 るうやとて 水
 舟と舟 弱
 舟と舟 弱
 舟と舟 弱

七卷之内
附錄